

# 相談ネットワーク通信

2025.1月30(木)

子育て・教育なんでも相談ネットワーク

No.130

700-0822 岡山市北区表町1-4-64 上之町ビル3F

TEL・FAX 086-226-0110 Eメール: soudan-net@vivid.ocn.ne.jp

ホームページアドレス <http://www.soudan-net.sakura.ne.jp>

## 明けまして

## おめでとーにございます

### 相談員一同

子育て・教育なんでも相談ネットワーク会員のみなさま、あけましておめでとーございました。遅いあいさつになりました。今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

昨年は、能登半島地震にはじまり記録的な猛暑など、自然と人間との共生がいかに難しいかを感じさせる年でした。子育て、教育の分野でも厳しいものがあります。しかし、これは、自然災害ではありません。炭鉱のカナリア(英語では: Ke a canary in a coal mine)という言葉があるそうです。近代ヨーロッパにおいて、石炭

採掘に携わる炭鉱夫が、カナリアを籠に連れて坑道に入ったことに由来するようです。坑内で有毒ガスなどが漏出した場合、それが無色・無臭のものであつても、カナリアがいち早く察知して、さえずりや挙動に変化があらわれ、危険の前兆を知らせてくれることから、(金融など)危険の警告となるものや、前兆を示す指標としても用いられる言葉だといえます。

昨年10月文部科学省が公開した「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」によると、病気や

経済的理由を除き、心理・社会的な要因などで小中学校に年30日以上登校しない不登校児童生徒数は、過去最多の34万6482人となり、前年度から47434人(15.9%)増加。増加は11年連続となっており、初めて30万人を超えた(前年度は29万9048人)といえます。高校生も同様に不登校の増加傾向が続いています。年齢を問わず、社会的ひきこもりの事例も急増しています。

人一倍鋭敏な子ども・青年たちが、「炭鉱のカナリア」のように、学校や現代社会の内包するひずみにいち早く反応し、

息苦しさに耐えられなくなっている現象ではないか、と指摘する人がありますが、うなずかずにはいられません。子どものみならず、大人たちにとつても「自分のままで大丈夫」という安心感と自己肯定感が充足され、「みんな違ってみんないい」とおおらかに認めあえるような社会が、切実に求められているのではないのでしょうか。

私たち「子育て・教育なんでも相談ネットワーク」は、いまなお深刻さを増す不登校や引きこもりをはじめ、非行・問題行動・進路問題など、子育て・教育に関わるいろいろな悩みの解決にむけて、ともに相談し支え合う場として、35年活動を続けています。子どもたちの健やかな成長を願い、お互いの個性を認め合い温かくいたわり合う社会をめざして、今年も相談ネットワークでは、少しでもお力になれるよう相談活動を進めたいと思います。また、相談に応じるだけではなく、他団体とも協力しながら、子どもと教育に関わるとりくみをすすめていきたいと思っています。さて、今年も「巳年。巳(みへび)」は、神様の使いとして大切にされてきた動物で、脱皮を繰り返すことから不老不死のシンボルともされています。巳年は、「再生や変化を繰り返しながら柔軟に発展していく年」になると考えられます。

す。元代表の難波一夫も8回目の年男になりました。(ネットワークには7回目・6回目の年男がいます)「発展」のことばを希望に、よい一年になるようがんばりたいと思います。みなさまも、よい一年になさうてください。

山本和弘・秋山正美

「子育てするなら倉敷市で」というけれど…

正保 宏文

「子育てするなら倉敷市で」というのは、伊東香織倉敷市長の口癖である。県内で、小中学校の給食費の無償化が徐々に進み、2024年度7市町で小中学校とも完全無償化、6市町で一部無償化や何らかの負担軽減を進めている。ところが倉敷市では、今年一月から小学校で一食20円、中学校・支援学校で一食25円値上げをした。(経過措置で3月分までは、倉敷市が負担)現在、世の中は、日本国憲法の義務教育の無償化に向けて動き出している。その一環として給食費の無償化が進んでいるのだ。こんな時によりよって倉敷市では、値上げ



である。こんな倉敷市に子どもの未来を託せるのか…。倉敷市は中国・四国の中で財政力指数は第3位の自治体である。しかも自由に使える財政調整基金が112億円(2024年5月末)たまっている。一年間に必要な給食費は約25億円。もし、倉敷市が本当に「子育てするなら倉敷市で」と考えているのなら、一日も早く、給食費の無償化や高校卒業までの医療費の無償化を進めるべきではないか。未来の主権者に暖かい光を当てた政治があつてもいいのではないか。そして、老いも若きも倉敷市民であつてよかつたといえる倉敷市にしていきたい。私たち倉敷市民が胸を張って市外の人たちに「子育てするなら倉敷市で」といえる状況をつくっていかなければと思うが、これは、私だけのたわごとのだろうか…。



（1）「ケリをつける」という言葉があります。漢字で「鳧を付ける」と書くことがあります。「鳧」はこの鳥のことです。

# ケリをつける

相談員

山本 和弘

「チドリ目チドリ科タゲリ属に分類される鳥類の一種」で、その甲高い鳴き声が、「ケリ、ケリ」と聞こえるところから名付けのようです。それでは、「ケリをつける」という言葉の意味するところか？この鳥とどのような関係があるのか？というところ、無関係。当て字らしいですね。「ケリをつける」の語源は、過去の助動詞「けり」に由来すると言うのが通説です。「けり」という助動詞は、「今は昔、竹取の翁といふものありけり」など用法に見るように、「人づてに聞いた過去の事実」をあらわす語で、「たどサ」というニュアンスになります。「き」という助動詞が、「自分が体験した過去の事実」をあらわすのと、はつきり区別されます。助動詞「けり」には、「はじめて気づいたが、だったのだなあ！」という、発見をあらわす場合があります。この用法は、一般に「詠嘆」と名づけられ、「くだなあ！」「ことよ！」などと訳されます。和歌などに多く用いられる用法で、「け

り」で歌が終息する。締めくくられる。というわけで、物事の決着をつけるときに、「ケリをつける」というようになったそうです。もちろん、「蹴りを入れる」は似て非です（寒〜）。

（2）ネットワーク通信No.128の記事で、映画『橋のない川』のポスター入手のいきさつについて「つづく」と書いたまま、次号では話題がカナヘビに転じてしまいました。今号で一応のケリをつけておきたいと思います。

十年以上前に、こんなブログ記事を書きました。

夏ゆくや それぞれの老ひ 輝きて  
<https://kazgsan1.blog.fc2.com/blog-entry-405.html>

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ  
 花を買ひ来て、妻としたしむ

啄木のこの歌が、ことあるたびに念頭に浮かびます。でもそこに、自虐や自嘲の感情が入り込む余地はなく、ただ、感嘆の想いが募るばかりです。この日も、この歌が脳裡を幾たびも駆け巡りました。

この日、高知に一泊で出かけたわけは、学生時代のサークル（教育系の研究サークル）の同窓会に参加するためでした。一九五〇年代から七〇年代まで、五〇名参加の大盛況で、旧交を温めたり、

大先輩の経験談に耳を傾けたり、懐かしい、エネルギー充填のひとつときは、瞬間に過ぎました。(中略)この会の発起人、兼事務局長、兼裏方の、全てを担って下さったN氏は、文科の大先輩。高知県を中心に活動する映画配給会社の社長です。会社の創設者だった故鎌倉信一郎さんは、映画『虹をつかむ男』の主人公(西田敏行が演じています)のモデルと言われます。「人口の過疎はあっても、文化の過疎はつくらない。」が持論でした。

N氏は、会社の倉庫に眠っていた往年の名画のポスターを、何種類も会場まで持ってきて下さり、「欲しかったら持って帰ってよい」とのこと。初演当時のまま、美しい保存状態のポスターで、全部欲しかったのですが、遠慮して、今井正監督「橋のない川」第一部、森川時久監督「若者たち」、山田洋次監督「同胞」、野村芳太郎監督「砂の器」などのポスターをGET。浮き浮きして、ホテルまで持ち帰り、ベッド脇に大切に丸めて置いたのです。

ところが、なんと、うかつにも翌朝、出発時にホテルに置き忘れてしまいました。朝の散歩の帰りが、雨にたたられ、沈着さを欠いたせいもあるでしょう。置き忘れたことを思い出したのは、高速バスでほとんど瀬戸内海を渡ってしまつて

からというお粗末。かなり自己嫌悪と  
いうか自己不信です。とほほ。

(3)次は、そのおよそ一週間後の記事。大雨の中を嬉しき宅急便(<https://kazgsani.blog.fc2.com/blog-entry-416.html>)。

今日は朝から雨で、大雨警報も発令ですので、おとなしく家の中に閉じこもっています。

窓の外は暗いし、気圧は低いし、気分も体調もかたつとしません。と、チャイムの音がして、宅急便が届きました。(中略)なんと、高知のNさんが、早速、映画ポスターを送って下さったのです。「水濡れ厳禁」のシールとともに、ビニールで厳重にカバーされた丁寧な梱包。頑丈な段ボール箱の中には、さらに厳重な梱包。はやる心で、梱包を開きます。

「更級日記」で少女時代の作者が、おばから物語の数々を櫃(ひつ)に一杯プレゼントされ、「はしるはしる、わづかに見つ、心もえず、心もどなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内にうちふして、ひきいでつ、見る心地、後のくらひもなにかはせむ。」と、胸をわくわくさせながら先を読み急ぐ場面をふと思ひ出したりしています。

先日、このブログで書いたとおり、私が

ホテルに置き忘れたポスターは、今井正監督「橋のない川」第一部、森川時久監督「若者たち」、山田洋次監督「同胞」、野村芳太郎監督「砂の器」などでした。

ところが、送って下さった箱を開けてみると、それらの他に、なんと、ジブリ関係の「風の谷のナウシカ」「魔女の宅急便」「天空の城ラピュタ」「隣のトトロ」をはじめ、貴重な名画のポスターがどさり。目もくらむようなプレゼントでした。

(4)記事の補足をしておきます。イニシャルでN氏と書いたのは、馴田正満さん。映画配給会社「四国文映社」の代表を務められ、高知県を中心に四国各地での上映運動に携わり、時には岡山県内の地域や学校での上映にも出張してこられることもありました。退職後は地域の様々な民主運動に献身され、高知市にある平和資料館「草の家」の学芸員としても活動されてもいます。「ケリをうつける」つもりが、話がまだ続くかもしれません(汗)

やまもと かずひろ

# わたしの一冊

相談員 田中博



## 崩壊する日本の公教育

鈴木大裕 著  
2024年10月  
集英社新書

「子育て教育のつどい2021」の講演「コロナ禍が映し出した教育の闇と光」の講師、鈴木大裕さんが「崩壊する日本の公教育：2016年」の続編ともいえる「崩壊する日本の公教育」（2024年10月発行：集英社新書）を著わした。帯封には「日本が米国の公教育『改革』の過ちを繰り返さないために：

安倍政権以降、『学力向上』や『愛国』の名のもとに政治が教育に介入し始めている。その結果、教育現場は委縮し、教育のマニユアル化と公教育の市場化が進んだ。学校はサービス業化、教員は『使い捨て労働者』と化し、コロナ禍で公教育の民営化も加速した。日本の教育はこの先どうなってしまうのか？：米国に追随する日本の教育政策の過

ちを指摘し、あるべき改革の道を提示する」とある。

6つの章からなる本文は以下のとおりで、終章にあるべき改革の道が提示してある。第1章：「お客様を教育しなければならぬ」というジレンマ：新自由主義と教育 第2章：人が人でなくなっていく教育現場：教員の働き方改革の矛盾 第3章：新自由主義時代の「富国強兵」教育と公教育の市場化：政治による教育の「不当な支配」 第4章：「自由」の中で不自由な子どもたち：コロナ禍が映し出した教育の闇と光 第5章：「教師というしごとが私を去っていった」：教育現場における「構想」と「実行」の分離 終章：「遊び」のないところから新しい世界は生まれ

ない  
私は、終章の「遊び」という言葉に強く惹かれた。高校教師の時代、私は「クラスづくり」「リーダー講習会」などで「集団遊び」を実践した。背景には、現在にはほぼ皆無となった地域での「異年齢集団の外遊び・集団遊び」が、1970年代から地域で子どもが遊ぶ場所の減少などとともに衰退の一途をたどっていたことがある。「遊びは子どものきわめて知的な活動であり、子どもは遊びをとおして自然や社会を動かすことを学んでいる。子どもは遊びのなかで仲間

をつくつたり、外したりしながら、社会正義とは何かを探索し、どの仲間には厳しく対応するかを学びながら、集団のあり方を知的に追及している。このような集団認識を基礎にして、子どもたちは集団で生きることのすばらしさや人間にたいする深い共感を獲得していつている」(1971年、全生研常任委員会著：学級集団づくり第2版)

おかやま教育文化センターは2022年3月から4月にかけて、0歳から18歳の子どもがいる保護者の方々に、「子どものスマートフォン等の利用に関するアンケート」をお願いし、307人から回答を得た。

アンケートの記述の部分に「悩み ○スマホは依存性が高いようで利用時間が長くなり、他の遊び(外遊び)に興味を示さない。・トラブルがますます少なくなり、身体を動かして友達同士で群れる経験が減る。子どもの感

性の低下を心配する。文字で会話するばかりで、トラブルになりやすい。実際に人の顔を見て話をする大切さを感じてもらいたい。」とあった。「アンケートの集計と分析」の4、遊び・外遊びの減少による発達ゆがみでは、『遊び』にはルールがあり、これを守ることによって『遊び』は楽しくなる。この体験をおして、社会性・創造性・自発性を育て、他者の存在を意識することができると主張する。『遊び』は子どもたちの心身の発達にとって不可欠のものである。記述回答に「特に気にかかること」として7、9歳(小学1年生、3年生)が『屋外遊びの減少』を多く選択していた。「遊び・外遊びの減少は子どもたちが『人間になる』ために最も基本的な能力や機能に遅れやゆがみが出るのではないかと危惧される。」と『遊び』の大切さが強調された。

本書の終章では著者は「地球の終わりがいよいよ現実味を帯びてきた今、新自

由主義批判だけでは不十分であり、私たちが抗うべきは資本主義そのものではないか。」として資本主義による自然と人間の分離を解説し、「資本主義がでつち上げた非生命体の世界は、一人ひとりの命や一つひとつの教室の生態系を無視して、教育をも工業的に、死んだ物体の加工のように扱うのだ。自然と人間の分離は人間の子育てにも影響し『自然と教育の分離』をもたらし」と主張する。

著者は遊びについて、子どもの遊びよりは、まず大人の「言動や気持ちのゆとり・余裕」に焦点を当てている。「今日の社会の閉塞感と息苦しさは私たちの生活の中に『遊び』がないからではないか」と問い、「生活の中に余白を『遊び』をつくってゆることが大切で『遊び』のないところから、新しい世界は生まれえない」と説く。

ギリシヤ語では教育・文化教養を意味するパイディアは「子どもの遊び」を意味す

るパイディアに由来する。すなわち「遊ぶ」ことは「学ぶ」ことなのだ。

この一冊を通読して、自然の中で「遊び」と「学び」が共存する社会の復権を求めずにはいられない。

たなかひろし

